『吾輩は猫である』殺人事件

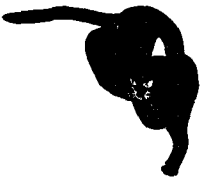
奥泉 光

『吾輩は猫である』殺人事件

奥泉光

新潮社

純文学書下ろし特別作品



『吾輩は猫である』殺人事件

著者　奥泉光（おくいずみ・ひかる）

発行　一九九六年一月三〇日

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号一六二　東京都新宿区矢来町七一

電話　編集部　〇三―三二六六―五四一一

読者係　〇三―三二六六―五一一一

振替　〇〇一四〇―五―八〇八

印刷所　二光印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

価格は函に表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

©Hikaru Okuizumi 1996, Printed in Japan

ISBN4-10-600657-X　C0393

『吾輩は猫である』殺人事件／目次

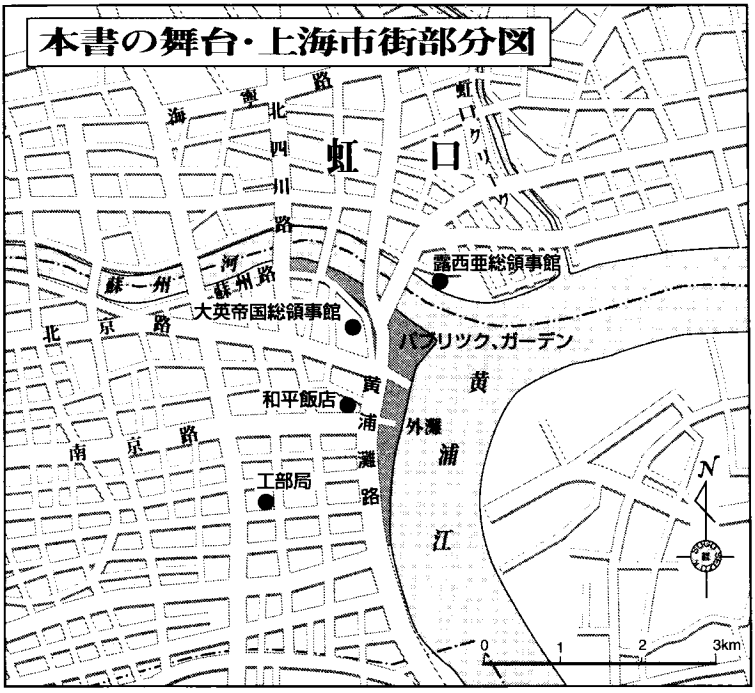
序章　吾輩の上海到着迄の顚末及び事件の発端　9
第二章　苦沙弥先生横死を巡る謎の数々　43
第三章　諸猫の捜査が開始される　85
第四章　史上初、月夜の推理競争　137
第五章　幻想浪漫の香りは虎君の推理　189

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

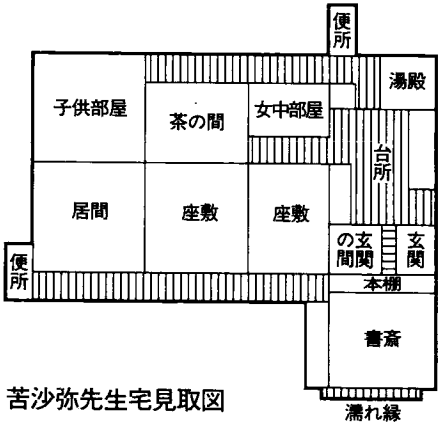
第六章　怪しい船中にての吾輩の冒険　241
第七章　ガーデンの猫を襲ふ新事件の勃発　323
第八章　猫部隊黄昏の出撃　369
第九章　世紀の大実験　遂に真相が明かされる　443
終章　純然たる蛇足　495

『吾輩は猫である』殺人事件

猫たちへ



Map by SOGO SEiZU



苦沙弥先生宅見取図

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序章　吾輩の上海到着迄の顚末及び事件の発端

一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。吾輩はいま上海に居る。征露戦役の二年目にあたる昨秋の或る暮れ方、麦酒の酔ひに足を捉られて水甕の底に溺死すると云ふ、天性の茶人的猫たるにふさはしい仕方であの世へと旅立つた筈の吾輩が、故国を遠く離るること数百里、千尋の蒼海を隔てたユウラシアの一劃に何故斯くあらねばならぬのか。読者諸賢の不審は至極尤もである。尤もではあるけれど吾輩がここに斯うしてある事実許りはいかにも動かし難い。永年の思索の末に我惟ふ故に我ありとの一大哲理を看破した西洋の哲学者があつたさうだが、何もわざ〳〵哲学者の浅智慧抔借りずとも我在るのは慥かに疑ひない。宇宙の外れの其又隅つこの一辺に、一尺四方程の些細な地面を占領してゐるのは間違ひない。とは云へ是では読者の疑念は終に晴れぬ儘であらう。実は吾輩自身も若干の道義上及び文芸学上の責任を感じて居る。いま暫く言葉を加へて見るのがよからうと思ふ。

黄塵万丈たる大陸の岩塊に源を発し、千澗を集めて不尽の水を湛へた大河長江。其茶色い水が海へ向つて流れ落つる所、広大な湿地帯を拓いた東亜の大都市に、無論吾輩降つて湧いたのでもなく、猫が未だ羽を生やす生物進化の恩恵に浴せぬ以上、海を渡つたには相違ないが、ではどうして海を渡つたのか。開闢以来の開明的猫を自負する吾輩は曾て、縁側で惰眠を貪る事のみを天職と心得るあまたの凡猫を尻目に、運動の効験を高らかに称揚し、一族郎党率き連れて鎌倉あたりに繰り出さんと考へた事もあつたけれど、さすがに水泳自慢の吾輩とても何百海里になん〳〵とする東支那海を泳いで渡るのはちと無理がある。泳いだのでないとすれば、つまりは船で来たのである。

四方を海に囲繞された島国日本から大陸迄渡るとなれば、五歳の童児でも船舶の利用を思ふだらう。何でも大概はさうだが、説明されて了へば拍子抜けする程に事は平凡である。手品の種は大抵馬鹿見た様に単純である。然るに此平凡事を吾輩が篤と了解したのは随分と時間が経過した後のことであつて、水甕の縁を爪でがり〳〵と掻いてのち永らく幽冥界を彷徨つた挙句、久し振りに目を醒ました時には、自分が全体何処に居るのか皆目見当が付かなんだ。

兎に角真つ暗である。猫は人に較べて夜目が効く動物であるが、驚いた事には眼蓋を一杯に瞠いても網膜に映ずる物が一つも無い。黒漆桶に在るが如く、天地四方黒漫々として一毛の光だに見えない。然も此暗黒世界が砂利路を往く車見た様にがた〳〵震へてゐる。加へて縦横上下にゆら〳〵大きく揺れもする。胸が悪くて仕方がない。立ち上つて歩かんと試みれば忽ち眼が廻つてへたり込んで仕舞ふ。と又前肢をうんと踏ん張つて胴体を持ちあげて見る。立つたからとて別段の利益の無いのは先刻承知ではあるが、さりとて坐つた儘でゐるのも何だか不安である。

かうして幾度か立つたり坐つたりを繰り返した頃合、ここはどうやら地獄らしいとの理解が漸

くにして得られた。漸く得たにしては有り難くない結論ではあるけれど、正体の分らぬ物と係はり合ひになる位恐ろしい経験はないのであつて、お化けが怖いのは主に此属性に因る。とりあへず地獄と名付けて仕舞へば僅かに安堵の心持ちが尻尾から背中へ立ち昇つて、稍落ちついて辺りを見回せば矢張り何も見えない。

殊更な野心も無く、大した欲も出さぬ儘春秋を迎へては送り、鼠一匹殺さぬ平和的猫であつた吾輩にすれば、地獄へ落とされたについては閻魔に文句の一つも付けたい所ではあつたけれど、生前の所業が今日の事態を招来したに違ひないと、やがて独り暗闇で自省するに至つた。探偵なる職業を殊の外毛嫌ひする旧主人の影響もあつてか、吾輩も探偵は大嫌ひである。探偵趣味を憎むにかけては猫後に落ちぬ丈の自信がある。とは云ふものの吾輩自身かの悪徳に染まつてゐなかつたとは云ひ切れぬ側面があるのも片方の事実だ。主人をはじめ迷亭寒月東風独仙ら、臥龍窟に出入りする諸氏の日頃の行状につき、吾輩が探偵的興味を抱き以て熱心に観察した行為は天にも地にも覆ひ難い。ときには明々白々たる偵察の気構へを五体に漲らせ向かう横町の金田邸に忍び込みさへしたのである。無論巷間に棲息せる凡百の探偵が私利を目指して探偵的振る舞ひを為すに対して、吾輩の夫は純然たる遊戯に属しては居る。風流人が山野を漫歩して詩想を得るが如き心持ちに於て吾輩は探偵趣味を発揮したのである。吟行の俳人の心機を以てして金田邸の垣根を潜つたのである。実際吾輩は鰹節の一片、飯の一粒だに利益を享受した覚えはない。だが不要な詮索を為した事実其物は否み難く、探偵的であつたか否かについてのみ判断するなら他の探偵どもと同然である。動機が純粋である丈却つて罪は重いと目されざるを得ぬやもしれぬ。

貪婪の罪人は飢餓地獄に投げ入れられ、性淫なる者は血の池地獄に抛り込まれる伝でいくなら、吾輩の堕ちた先はさしづめ無明地獄とでも呼ぶ他あるまい。つまり我が探偵趣味の行き着く所、

倫敦塔の地下牢の如き、視る事叶はぬ暗所に永久に閉ぢ込められる懲罰となつて帰結したらしい。斯うなつてはもうどうする事も出来ない。到底助かるものではないと吾輩は観念した。観念はしたけれど、然し斯う暗くつては敵はない。がた〳〵ゆら〳〵も一向収まる気配が無い。

夫にしても念仏位役に立たぬものは世にあるまいと、此時吾輩は八つ当たり気味に考へた。死ぬるに際して吾輩は南無阿弥陀仏を二度唱へた覚えがある。悪逆非道の大罪人でさへ今際の念仏一つで救はれるとの説に従へば、罪とは云へ微瑕たるにすぎぬ吾輩抔は当然極楽往生を疾うに得てゐてよい道理である。瑞気横溢の浄土に在つて、日々是詠花吟月、患ひなき魂の安寧を得てして蓮華を枕に昼寐をしてゐてよい筈である。とは云へ冷静になつて考察を加へて見るならば、あまたの聖賢達人を続々輩出し、西洋のルネツサンスにも比すべき文化興隆を誇つた鎌倉室町と明治の今とでは、念仏の値打ちに喰ひ違ひが生じて仕方がないとも思はれる。家康が江戸に幕府を置いてよりこちら、仏法僧侶の価値の下落は眼を覆はしむる態のものがあるが、まして貴賤を問はず諸人こぞつて街鉄の株が上つたの下つたのと大騒ぎをしてゐる現今の世の中にあつて、念仏の価格が地に堕ちぬとするなら寧ろ奇跡と云ふものであらう。ここに至つて吾輩は凡そ宗教なるものが生ける者の安心立命にのみ限つて益する事実をつく〴〵悟つたうへで、まあ是も仕方があるまい、最早どうする事も叶はぬのだからと、二度目の観念をした。夫でもやつぱり胸は苦しい。眼は廻る。息さへ満足に出来ぬやうになつてくる。

吾輩はニヤーと闇中に声を放つた。斯う見えて吾輩は齢一歳を経た歴とした成猫である。猫抔は始終訳もなくニヤー〳〵鳴いて居るのだらうと人は軽く考へるかも知れんが、苟も猫たる者さう〳〵無闇矢鱈と瑟を鼓するものではない。猫に限らず、狗がワンと吠え、蛙が田んぼで鳴き、蟬が樹陰で喚くのには悉く意味があるのであつて、そも宇宙の森羅万象意味を有せざるは無い。

寧ろ無意味な事を喋舌つて自慢顔で居るのは独り人間許りだ。朝の挨拶に始まつて睡眠中の寐言に至るまで、がや〳〵ワー〳〵脈絡のない言辞を徒に舌に乗せては恐れ入つたり悲しんだりしてゐる様子はいつそ哀れである。果ては一切合切理不尽なりと、虚無主義を叫ぶ輩に至つては滑稽としか云ひやうがない。勝手に世界を思ひ描いて置きながら、其世界に根拠が無いと嘆いて居るのだから馬鹿々々しい。餅を絵に描いて其餅が喰へぬと泣く子供見た様なものだ。人生不可解と松の木に記して華厳の滝壺へ落ちた生徒が旧主人の教へ子にあつたさうだが、彼抔も言葉を濫費せる人間文明の可哀相な犠牲者の一人に違ひない。とは云へ文学を嚆矢に言語を不必要に弄するのが人間の娯楽の一つではあらうから、特に吾輩が文句を云ふ筋合ひはない。けれども猫の鳴き声に深甚なる意趣が込められてゐる事位は知つておいてよからう。殊に吾輩は政治を心得た老練の猫であるから、人間心理の力学を精密に計測した上で必ず鳴く。実際鼠を捕らぬ猫が餌を頂戴するには此芸を以てする他ないのであつて、生活の必要上技巧を磨きに磨き抜いた吾輩の妙音は、ときとして実用政治の領野を遥か高処に超出して、ベトホベンのシンフオニーにも比すべき芸術の霊域に迄達した事さへある。少なくも吾輩に較ぶるなら寒月君のヴイオリン抔は製材所の騒音と選ぶ所はない。

然るに此時に限つては、吾輩が漏らしたニヤーは政治にも芸術にも絶対無縁のニヤーであつた。見栄も体裁も何も彼もが削ぎ落ちた裸体のニヤーであつた。こんな鳴き方をしたのは生まれて間もない頃を除けば一度もない。

始めて物心ついたとき、子猫の吾輩は薄暗いじめ〳〵した所でニヤー〳〵泣いて居つた。すると誰とも知れぬ書生に捕へられ、烟草の烟を吹きかけられた。此書生の掌の裏でしばらくはよい心持ちに坐つて居つたが、暫くすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分丈が動く

のか分らないが無暗に眼が廻つた。恐らくは吾輩の方向を狂はせる為に書生は腕をぐる〳〵廻して抛り出したのであらう。どさりと音がすると同時に眼から火が出て、気付いて見れば吾輩は独りで笹原に居た。書生の姿もなければ母親も沢山ゐたはずの兄弟も見えない。笹原を這ひ出した吾輩は池の辺に出て、為す術なくニヤー〳〵と只泣き続けた。其後程なく竹垣の破れ穴から顔色悪き胃弱の教師が宰領する臥龍窟に潜り込み、一樹の蔭の縁あつて飼ひ猫となる僥倖を得たのではあるが、秋風渺茫たる池の面を独り眺めてゐた時の寂寥感不安感は昨日の事の様にあり〳〵と覚えてゐる。

何故吾輩が斯様な幼児期の記憶を脳裏に甦らせたのかと云へば、つまりたつたいま吾輩が暗中に漏らしたニヤーと池辺のニヤーが同じ性質を有してゐたからに他ならない。我知らず口から漏れた音声が過日の哀しき思ひ出に共鳴したのである。それらのニヤーは倶に絶対的孤独のニヤーであつた。孤立無援の存在が覚えず発する響きであつた。曾て主人は己の妻に向つて、猫の泣き声は感投詞か副詞か抔と愚にも付かぬ設問を呈した事があるけれど、此際の吾輩のニヤーは文法学言語学では到底分類不可能な、衣装を脱ぎ捨て剝き出しとなつた魂其物の発する血の叫びであつた。身裏に吹き荒ぶ嵐を嘆じたリヤよりも、宇宙もろとも己が身が砕けよと呪つたマクベスよりも、我が呦々たる音声は耳にする者の紅涙を絞らずには措かぬ、絶望の端的な表現たり得て居たであらう。吾輩は泣いた。恥も外聞もなく子猫の様に泣いた。うるさく吠えたてる狗でもよい。天秤棒を振り廻す魚屋でもよい。三味線屋でも地獄の幽鬼でもよい。何かに出てきて欲しい。生きて動き廻る者ならどれでもよかつた。同じ奈落の空気を呼吸する存在に是非ともまみえたかつた。何も無いならせめて灯りが見たい。吾輩は泣いた。孤独の絶望に泣いた。さうして小一時間許りも泣き続けたであらうか。やがて声は涸れ、四肢は力を失つて、だらしなく床に伸びた吾輩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com